

話題 13

沖縄の青い海と緩和医療

詩人、山之口獺は1903年（明治36年）に沖縄に生まれ、19歳で上京、59歳で亡くなるまで詩を書き続けた。愁いに満ちた数々の詩の中には、現代社会をも見透すかのようなまなざしが秘められている。「喪のある景色」の一節である。

「うしろを振りむくと
親である
親のうしろがその親である（略）
まえを見ると
まえは子である
子のまえはその子である（略）
こんな景色の中に
神のバトンが落ちている
血に染まった地球が落ちている」

国立病院機構沖縄病院に緩和ケア病棟が開設されて3年が経過した。様々な人間模様が描かれていった。まさしく、この空間は小さな戦場である。「生と死のはざま」でもがく人の世の、あまりにも具体的な、なま身の人間の格闘の場面の連続である。

病棟の最初のお客さんは県外、四国からの患者さん、森本さんでした。「母親は胃がんの末期の状態です。沖縄の青い海が見たいという母親の最期の願いをかなえてあげたい」との息子さんからの便りが届いた。

果敢にも、病棟のスタッフは受け入れの態勢を整えた。50歳代の主婦。進行した胃がんのため腹水でお腹が張っている。常時、吐き気があるため鼻から胃へ管が通されている。沖縄の海を望むには、あまりにも病状は進行し、苦痛を伴っていた。

その年の沖縄の5月は、ことのほか雨が多かった。森本さんの願いはかなえられないのではないかとみんなが不安に駆られた。奇跡的でした。土曜日の昼下がり、どんよりとした雲の合間に南国の太陽が顔をのぞかせたのです。

主治医と病棟のスタッフが、この瞬時を逃さず、宜野湾の海浜公園へと出かけた。沖縄の青い海を背景に、おしゃれに着飾った患者さんとその家族、そして主治医と看護師が加わり一枚の記念の写真が残っている。夢がかない、患者さんはその2日後に天に帰った。

数ヶ月後、病棟に思いがけない来客。森本さんの子供たちの面々である。子供たちの反省である。「沖縄の青い海が見たい」との表現は、実はお母さんの最期の思いやりだったのではないかとのこと。海が見たかったのは、お母さんではなく、子供たちに沖縄の海を見せてあげたかったのではないかと。お母さんからの子供たちへの最期の贈り物だったのです。

お母さんの最期の願いを実現するために、子供たちを含めて周囲のみんなが力を合わせて行動した。そうなのです。沖縄の青い海に託されたお母さんの深い思いは、「みんなで力を合わせて、仲良く生きなさい」というすばらしい絆（きずな）でした。

永遠の真実。「神のバトン」は、お母さんの手で子供たちに確実に手渡されたのです。沖縄の青い海。血に染まった地球。神のバトン。

2010年5月、「母の日」に